

画家いわさきちひろの足跡

執筆者：松方 路子

掲載誌：図録「いわさきちひろ展 母のまなざし・子どもたちへのメッセージ」
毎日新聞社、ちひろ美術館刊

いわさきちひろの絵は、見る人との間の距離が近い絵である。描かれているのは、誰もが知っている子どもたちであり、普段の、身近な情景だ。一見、簡単に描けそうな絵にも見える。しかし、間口が広い絵ほど奥が深い。このような絵をおよそ 30 年の間描き続け、世を去ったいわさきちひろという画家の生き様を知れば知るほど、絵の裏にどのような想いがあったのか、見えない部分も含め、少し理解できるように思える。ちひろの足跡をたどってみたい。

生い立ち

いわさきちひろ、本名岩崎知弘が生まれたとき、母・文江は福井県武生（現越前市）の女学校に単身赴任をしており、その地で初めての子どもを生んだ。父・正勝はシベリアに出征して日本にはいなかった。生まれる前、両親は生まれてくる子を男の子だと信じて、男の子の名前を考えていたという。ちひろは陸軍築城本部の勅任技師と教師という社会的にも恵まれた両親のもとで三人姉妹の長女として、あたたかい家庭で少女時代を過ごす。大正デモクラシー、子どものために最良のものをという時代のなか、子どもの本の世界で活躍していた画家の初山滋や、岡本帰一、武井武雄らの描いた絵雑誌「コドモノクニ」を見たことが、ちひろに影響を与えた。「コドモノクニ」の頁を繰りながら見た夢のように美しいさまざまな絵は、ちひろの記憶に強く残っていく。

俳句や絵もたしなんだ父親の影響か、幼いころから絵を描くのが得意で、両親から許され、洋画家・岡田三郎助に入門したのは、14 歳のときだった。少しずつ、戦争の足音が日本に近づいていた時代。しかし、ちひろは、まだ阻まれることなく、自由に育っていた。

戦争

1939 年、20 歳でちひろは親の薦めに従った結婚をする。同じように見合い結婚で結ばれ、仲むつまじい夫婦であった両親は、ちひろにも同じ幸せが訪れると信じていたのであろう。しかし、ちひろは母とは違い、気の乗らない結婚に抵抗した。夫の勤め先の旧満州（現在の中国東北部）・大連へ渡ったが、夫の自殺で帰国する。そのことについて、身近な家族にも語る事が無かったことから、ちひろにとっては、封印したい過去であったことが伺える。

帰国後は、1942 年の文部省美術展覧会で見た絵「水浴」に心を動かされ、当時 33 歳だった新進の画家中谷泰の門を叩き、油絵を学ぶ。母はそのころ頃教職を退き、大日本連合女子青年団の主事として、満州へ“大陸の花嫁”を送る仕事をしていた。父は除隊後も、国内で軍の建築にたずさわっていたといわれる。新しく東京の中野に買った土地付きの家は、未亡人となったちひろも迎え、父親が改築した洒落た洋館だったという。しかし、旧満州・勃利の満蒙開拓女

子義勇隊訓練所の女性たちへ書道を教えるという名目で、再度 1944 年 4 月に大陸に渡ったちひろは、生きていくこと自体も困難な、厳しい現実初めて直面する。幸い、以前の書の教え子の叔父であった同地の戦車隊の部隊長・森岡正に、妹とともに庇護され、戦況の悪化を見越した彼の判断により、いち早く夏には帰国することができた。この森岡大佐の尽力がなければ、ちひろたちは生きて帰れなかったであろう。1945 年の 5 月の山の手の空襲で中野の家を焼かれたちひろと家族は、疎開先の長野県松本市の父方の実家で敗戦を迎えた。その翌日から書き始めた日記を見ると、日本がまだ戦い続けられると信じきって、敗戦の知らせを悔しく思ったというちひろの率直な心境もつづられている。8 月 15 日から、翌年の春にひとり上京するまで、ちひろは多くの日本人同様、大きな価値観の転換をせまられた。そのなかで、絵を再び描きたいという想いが強くなっていく。

戦後

敗戦の翌年、疎開先の松本市で参加した共産党の演説会で、ちひろはそれまで国策を全うした両親とともに聖戦と信じてきた戦いが、侵略戦争であり、反戦を訴えて捕らえられた人々がいたことを初めて知り驚き、感動を受ける。絵描きになるのを辞めるように諭す父の言葉に反発するかのようになり、絵を描いて人々のために働きたい、という強い思いで、新聞に掲載されていた日本共産党の宣伝芸術学校に入学するため 1946 年の春上京した。母方の叔母の家に身を寄せ、つつましい生活をし、日々スケッチを重ねながら、ちひろは何を考えていたのであろう。当時の自画像からは、生き方への強い決心のようなものが伝わる。(作品 121) 又、そのころ師事していた丸木俊らのプロレタリア美術独特の影響も見てとれる。

戦後の混乱がいくらか落ち着いてくると、子どものためのさまざまな教育的出版物の必要性が高まる。戦前にも大衆的に普及していた紙芝居は、内容を変えて 1950 年代前後から出版が盛んになり、新しい教育の実践のために、幼稚園や保育園で沢山求められるようになった。そうした要望に応じて教育紙芝居研究会(のちの童心社)は、児童文学者と画家の力を結集した作品を多く世に出し、その一人にちひろも抜擢された。女性が 1 ヶ月生きていける報酬を約束され、いわさきちひろは画家として立つ決心をしたのであった。

ちひろは 1950 年、前年出会った若い коммуニストの松本善明と結婚し、翌年一人息子・^{たけし}猛の母となる。しかし、1952 年に司法試験に善明が合格するまで、家族の生活を支えたのは、ちひろの絵筆であった。第一次ベビーブームの子どもたちが育つのと比例するかのようになり、子どもを読者にした雑誌や読み物が次々に刊行されていく。「よいこのくに」(1952 年創刊)や、戦前に創刊され、戦時中は休刊していた「キンダーブック」も復刊していた。質・量ともに充実した、新たな絵本の時代の幕開けだった。1953 年から、岩波書店によって外国の絵本が新たに紹介され、さらに 1956 年には福音館(現・福音館書店)が「こどものとも」で、一冊一画家の新しいタイプの月刊絵本を発表、その第 12 号にちひろも登場し、絵本デビューをした。(作品 74~76) 以後、ちひろは次第に名を知られていく。1960 年代に入ると教科書や子どものための印刷物に絵

を描く画家仲間たちとともに、画家の著作権の確立を求める運動を始めた。

一方、月刊絵本「こどものせかい」で至光社は、1958年からちひろを主要画家の1人に迎える。「感じる絵本」という新しい概念を打ち出した編集者武市八十雄とともに、ちひろは絵本でしかできないことを模索し始める。ストーリーを説明するために絵を描くのではなく、文も絵も画家の自由な発想を引き出し、幼い読者の感性にうったえる実験的な絵本づくりは、1968年から晩年まで毎年1冊続いた。(作品95~108)

1965年、ベトナムでアメリカ軍の北爆が始まり、その実態が世界中に伝えられると、日本でも反戦運動が高まり、ベトナムへの支援団体ができていく。田島征三らを中心に、絵本画家たちも、「反戦野外展」を開くようになる。そこに展示するB全サイズのポスター制作をちひろも頼まれ、1970年、ちひろはパステルで母親と3人の子どもの絵と「ベトナムのこどもわたしたちの日本のこども 世界中のこどもみんなに平和としあわせを」という一文を書いた。(参考図版1) 戦争中の中国を目の当たりにし、東京の空襲を体験したちひろにとって、ベトナムでの戦争は他人事ではなく、絵本画家として何ができるかを考えていた。ベトナムの子どもを描いたちひろの絵を見た編集者が、絵本の依頼に来た時、ちひろは自分に残された時間を知っていたかのように、その場でこの依頼を引き受けた。この絵本は、ちひろが初めて当時大学生であった一人息子を制作に参加させた絵本でもあった。(作品115~120)

画材の変遷

油絵を岡田三郎助から学ぶことから始めたちひろだったが、空襲で焼失するなどして、現在残っている油彩作品はわずか13点しかない。美術史家の草薙奈津子は、ちひろが洋画を出発点にもちながら、日本画の描法を取り入れたのは、「岡田が日本人の洋画確立を模索した道と共通するところがある」と言及している。油絵は、1962年の「子ども」を最後に描いていないが、この年は自宅を増築し、アトリエを2階に移す前年である。イーゼルは、新しいアトリエにも引き続き置かれたが、ドライフラワーの飾り棚と化し、長男が時々石膏デッサンをする時に用いられるだけであったようだ。新たなアトリエに移り、水彩画に専念しようと考えたのかもしれない。

ちひろにとって早く乾く水彩絵具は、沢山の仕事を限られた時間内で仕上げるためには、必須の画材であったに違いない。あまり大きくない画面に沢山の要素を盛り込み、ちひろは丁寧に、一人ひとりの子どもの靴下までにも注意を払って細い筆で仕上げた。油絵を描いていたころから明るい色調を好んだちひろは、発色の良い不透明水彩であるポスターカラーも水で溶いて使用し、絵具が水に溶けることの良さを段々と実感したに違いない。水分をたっぷり使った、日本画でのたらし込み、あるいはにじみといった技法を取り入れていったのには、展覧会などで先人の技術を見て学んでいたことや、丸木位里、俊の描く水墨画を見ていたことのほかに、書を学んだということもあるであろう。戦前、18歳のころから教育者であり女性書家であった小田周洋について、藤原行成流の書を学び始め、一時期は、小田が教える文化服装学園で習字を教え、書家をめざしていた。小田は万葉集などにも造詣が深く、書に対する姿勢などをも含め、ちひろは彼女から多くを学んでいたようだ。(作品? 参考図版?) 書を学

んだことは、ちひろの後年の筆運びや色のついた水墨画につながる。

ちひろの画風に変化がおとずれたのが、パステル画を実験的に描いた1年であった。(作品10、20) 凹凸のある木炭紙に鉛筆を用いて描かれたフランスの絵本を見て、ちひろも同じような紙にパステルで描き始める。パステルでクレヨンのような線を描き、またその粒子を水で溶かして水彩画のように使った。伸びやかな線描のおもしろさを覚えたちひろは、パステルを筆にかえても、その自由さを失わなかった。

ちひろは、ちいちゃんと呼ばれた小さいころから、画家としての晩年まで、子どもを一貫して描き続けた。その理由のひとつは、子どもが好きだったということがあるだろう。更に、大人になってからは、自ら描く子どもに理想を託していたのではないだろうか。ちひろの描く子どもたちは、喜怒哀楽をはっきりさせることは少ない。自分の周囲のものを見つめ、感じ続ける繊細な感受性がうかがわれ、その中にも凜とした意思の強さが見える。ちひろは物静かな人でありながら、様々な困難を乗り越え、画家になること、画家として生きることをつらぬいた。年を重ね、さまざまな責任を負い、身のまわりの者へ気配りをする立場となってからも、子どものような心を持ち続け、それを絵筆で表現することができた。女性として、画家として、母親として、その鋭くあたたかい目は多くのもを見てきたにちがいない。ちひろが一人息子を諫めるために書いた手紙のなかに、「人生は甘いことより苦しいことの方が多いのです。私の人生でも生きがいはあったけれど、それは苦勞の連続でした。美しいやさしい絵が甘ったれた生活の中から生まれるのではありません。」という一文がある。誰もが気軽に目にすることのできる絵本や印刷物の世界で、ちひろは常に高い目標をもちながら、その絵を描き続けた。